松山城本丸跡７次調査

調 査 地　　松山市丸之内（約145㎡）
調査期間　　平成27年5月11日～同年6月19日

本調査は、「松山城本丸防災設備等整備事業」に係る確認調査である。調査は、本丸跡の北部、乾門東続櫓の北東において防災用の地下ポンプ室及び水槽の埋設範囲を対象として実施した。調査の結果、江戸時代の整地土、切土斜面及び盛土、柱穴1基並びに小穴13基を確認した。

整地土は、北部は後世の攪乱によって多くが失われていたものの、標高の低い南部に比較的多く残存しており、土中からは19世紀の砥部焼が出土した。調査区南端部で確認した切土斜面及び盛土は、地山を北から南に削り込んだ上に土を積んだもので、盛土は乾門東続塀続東折曲り塀下の石垣の裏込土でもある。切土痕は東西に伸び、東の延長は本壇南隅櫓台石垣下に潜る可能性が高く、このことは過去の調査成果とともに、本壇石垣の南西部が盛土上に構築されていることを強く推測させるものである。盛土中から構築時期を示す遺物は出土していない。また、切土痕内の斜面で検出した柱穴は、埋土が盛土に近似していることから、盛土工事に関係するものと考える。小穴は、13基のうち7基が南北にほぼ等間隔に並ぶ。廃棄時期は、埋土に焼土や漆喰片が含まれること及び土層観察から、本壇西部が焼失した昭和8年以降と判断し得るものの、構築時期については不明である。

なお、基盤層（地山）の地質である砂岩、礫岩及び花崗閃緑岩のうち、礫岩と砂岩の境界を確認した。

今回の調査では、本丸の構築に関わる貴重な遺構を確認した。そのため、地下ポンプ室及び水槽の設置位置を変更し、遺構を保存した上で工事を実施することとした。

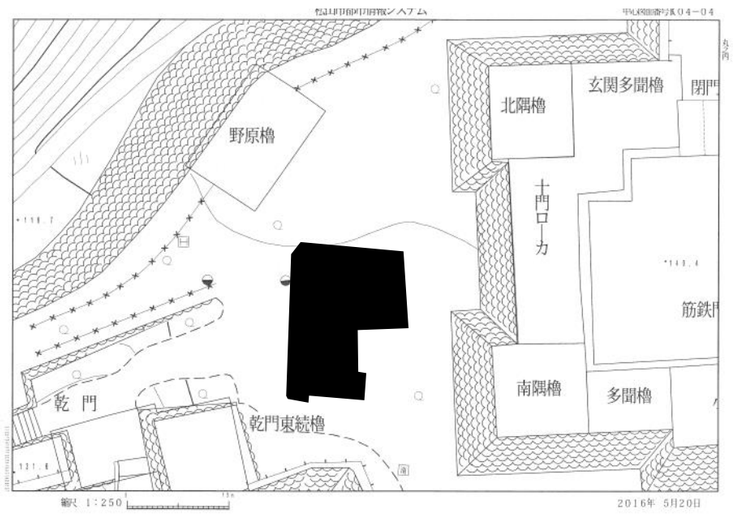


図１　調査区位置図（S=1/600）

写真１　調査区全景〈北西から〉

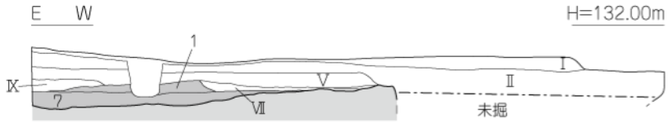
写真２　自然地形または切土痕〈西北から〉

写真３　自然地形または切土痕〈東から〉

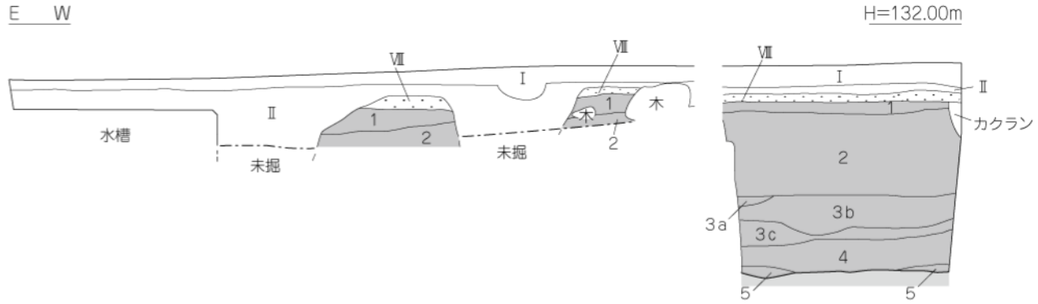
写真４　柱穴（SP14）〈東から〉

図３　調査測量図

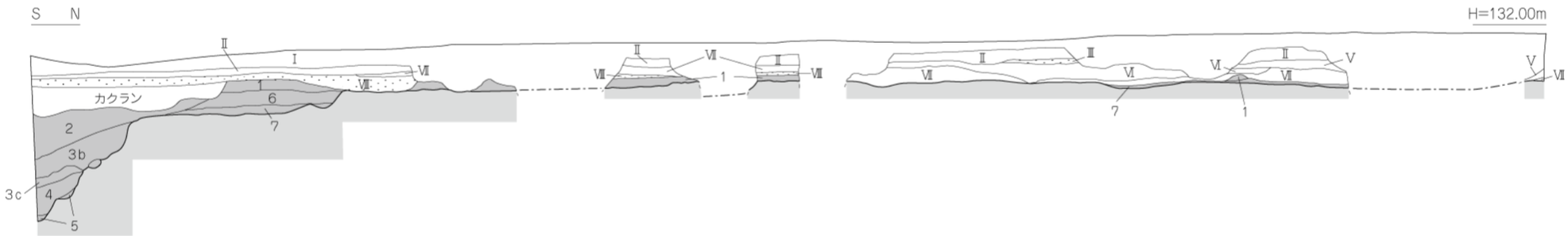
〔 南東壁 〕



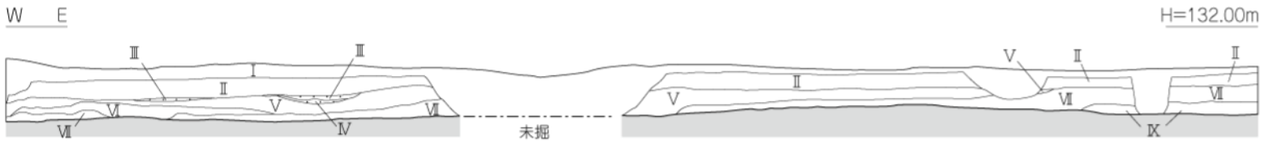
〔 南壁 〕



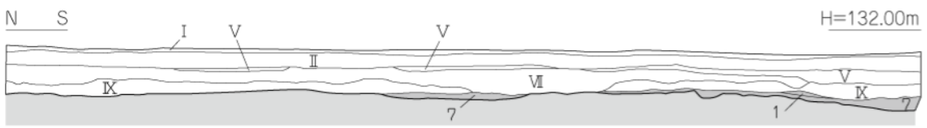
〔 西壁 〕

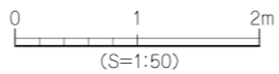


〔 北壁 〕



〔 東壁 〕





〔基本層位〕

Ⅰ　表土、現代のカクラン
Ⅱ　黄橙色砂質土と灰黄褐色砂質土の混層
Ⅲ　炭化物
Ⅳ　焼土
Ⅴ　暗オリーブ褐色砂質土（炭化物・焼土を少量含む）
Ⅵ　褐色砂質土
Ⅶ　オリーブ褐色シルト（炭化物・焼土を僅かに含む）
Ⅷ　焼土　→　昭和８年の火災時のものか
Ⅸ　褐色砂質土
Ⅹ　褐色礫岩（地山）

〔整地土及び石垣裏込め土〕

1　にぶい黄褐色シルト（炭化物、焼土をわずかに含む）：整地層①
2　灰黄褐色砂質土
3a　明黄褐色シルト
　b　にぶい黄褐色砂質土
　c　にぶい黄褐色砂質土（b よりやや土色が濃い）
4　黒褐色シルト
5　にぶい黄褐色シルト
6　にぶい黄褐色砂質土：整地層②
7　にぶい黄褐色礫（地山の風化土）：整地層③